唐後半華北諸藩鎮の鐵勒集團

――沙陀系王朝成立の背景――

西村陽子

はじめに
第一章　朱泚の亂と華北諸藩鎮の鐵勒・ソグド集團
第二章　八―九世紀の華北の鐵勒集團
おわりに

はじめに

本論文は、唐王朝後半期の建中年間（七八〇―七八三）に起こった朱泚の亂を手がかりに、唐後半期の中央政府および華北諸藩鎮における渾・契苾・阿跌という鐵勒系武人集團の活動を解明し、これが五代の沙陀系王朝成立の背景となることを明らかにするものである。本稿で扱うオルドスから代北にかけての地域は、農業と遊牧が交錯する地帯であり、唐王朝はこの一帯を降附した遊牧民で滿たし、その軍事力で邊境防衛を擔わせていた。[1] 本稿で取り上げる鐵勒集團は、八世紀終わりから九世紀にかけて、中央政府と華北諸藩鎮の中で中心的な位置を占めつつ、鐵勒系・ソグド系・党項の集團の東遷

という大きな流れを背景として次第に代北・河東地區に地歩を移し、そこから代北や河東、オルドスまで含む廣い範圍に強い勢力を保持し、唐末に至って次第に沙陀に合流し、その結果として唐末時期に強大な沙陀が出現してくることになる。

筆者はこれまでに、唐王朝終末期に華北地方の大勢力となり、唐王朝の終焉と五代王朝の成立を導いた沙陀突厥について、その內部構造や經濟基盤を論じてきた。沙陀突厥はその內部に多數の遊牧系諸族を包含していることから、「沙陀集團」もしくは「代北集團」とも呼ばれる[2]。筆者はその中で、特に沙陀三部落（沙陀・薩葛・安慶）・契苾・吐谷渾を「代北五部」と呼んで唐末・五代の沙陀集團の中核を構成する集團と定義し、沙陀集團が形成されていく過程を明らかにするとともに[3]、沙陀集團はこれらの他にも多數の遊牧集團を統合した多重的な構造を持つことを指摘し、唐末から五代に至る沙陀突厥の動向のアウトラインを提示した[4]。その一方で、代北五部の他にどのような部族が沙陀集團を構成したのかという問題には十分な回答を示してこなかった。

本稿で扱う契苾部と渾部については、榮新江氏[5]が夙に兩部落の類似性を指摘している。筆者はかつて「契苾通墓誌銘」に基づいて契苾部落の唐末の姿を詳論し、唐初以來の羈縻州であることと沙陀との關係を指摘した[6]。これを受けて蘇航氏[7]は渾・阿跌・契苾という鐵勒系三部落の類似性を指摘しつつ特に阿跌部の功績を明らかにし、阿跌部が北邊蕃部落を統括していたことを指摘した。山下將司氏[8]は阿跌部の事績を更に詳細に檢討し、阿跌が突厥阿史那氏と婚姻關係を結んでいることを指摘する。本論は、これらの業績を踏まえながら、八世紀末から九世紀にかけての中央政府による鐵勒・ソグドをはじめとする非漢族武將の重用が、その背後で進行しつつあった鐵勒部落やソグド・党項部落によるオルドスから代北への大規模な東遷と聯動しており、このような鐵勒や党項をはじめとする遊牧部落の動向が次の沙陀の擡頭を準備することを、唐から五代に至るユーラシア東部の歷史の中に位置附けなおす。すでに大中年間（八四七―八五九）以降の代北五部と沙陀突厥の興起については檢討を加えているため、本稿では多數の鐵勒・ソグド等の參與が認められる朱泚の亂の狀況から九世紀半ば頃までを扱う。なお、李抱眞などのソグド系の軍將にも東遷と移動先での勢力擴大の動きが存在するが、

紙幅の都合で割愛する。本稿においては、契苾・沙陀三部落・吐谷渾を「代北五部」といい、外側にある鐵勒や党項部落、ソグド等も含めて「代北集團」と呼び、これが沙陀の麾下の集團に變質していく時代に限って「沙陀集團」と呼ぶ。鐵勒系部落の渾・阿跌が「代北五部」に含まれない理由は本論で論じる。

朱泚の亂については、すでに日野開三郎氏によって、安史の亂後の藩鎭跋扈の事例として檢討されており[9]、また栗原益男氏はこの反亂が兩稅法を施行した時に起こったことに觸れ、連兵の點で藩鎭史を通じて最も規模が大きく、この反亂勢力の强さが、河朔の舊事と呼ばれる藩鎭の半獨立體制を傳統化したと指摘する[10]。堀敏一氏も藩鎭の性格という視點から建中二年（七八一）から貞元二年（七八六）年までの動亂を論じ、この戰亂の結果藩鎭の特別な地位が承認されたとする[11]。任育才氏も朱泚の亂に關する史料を、正史や編年史料だけでなく文集や詔敕類に至るまで網羅的に收集し、史料ごとに異なる日時を校訂して「奉天定難日譜」として確定された[12]。上記は中國史の視點からのものだが、朱泚の亂において官軍側にも非漢族の關與が多いことが、陳寅恪氏や桑原隲藏氏以來夙に指摘されている[13]。馬小鶴・柏曉斌氏らも朱泚の亂には叛軍側・官軍側も共に鐵勒人やソグド人、インド人まで加わっていることを指摘し、他にも官軍側で月支胡も加わっていることが明らかになっている[14]。ただし、なぜそうなるかについては具體的に說明されていない。本稿では、こうした動きの背後に、當時の華北で進行しつつあった鐵勒系部落の移動との關聯があることを明らかにし、唐朝內部に存在していた鐵勒系の遊牧集團と、九世紀初めに華北に移住し九世紀後半に擡頭する沙陀突厥とがどのような關係にあったかを論じる。

本論の構成は以下の通りである。第一章では安史の亂後の非漢族の活動と朱泚の亂の概要を述べ、第二章では朱泚の亂に官軍側で參與した鐵勒系の諸族のうち、唐王朝の朝臣の筆頭であった宰相渾瑊を出した渾部と、代北五部の一部である契苾部とが姻戚關係にあることを明らかにする。そしてこの時期、渾部・阿跌部を含めた鐵勒系や党項の集團が河西回廊からオルドス、代北・河東に移住する動きが存在し、彼らが唐末に沙陀突厥と合流していくことを論じる。なお、本稿では個別に鐵勒・ソグド・党項などを指す場合は個別の名稱を用い、複數の部族を指す場合に「非漢族」という語を用いる。

第一章　朱泚の亂と華北諸藩鎭の鐵勒・ソグド集團

第一節　朱泚の亂とその背景

安史の亂の時に活躍した官軍側非漢族については、これまでの研究で安史の亂以後、安祿山と史思明がソグド人であったことから、唐朝內部でソグド人に對する反感が强まり、ソグド人の中からはソグド姓や西方を聯想させる本貫を忌避する動きが廣がったことが指摘されている。[15] その一方で、中央政府や神策軍だけでなく、昭義・河東・振武・夏州定難軍、天德軍などの諸藩鎭においても、ソグド系だけでなく、鐵勒系や党項、契丹などの出身者が進出する動きは衰えていない。安史の亂後も、郭子儀の配下には多數の非漢族の蕃將が引き立てられ、郭子儀とともに安史軍と戰った李光弼（契丹）や李抱玉（ソグド）の他にも、僕固懷恩（鐵勒）・李懷光（靺鞨）・渾釋之（鐵勒）などがかぞえられ、邊防とともに河朔三鎭や安史の降將が安置された藩鎭への對應にあたっている。

朱泚の亂は、唐後半期に官軍側、特にオルドスや河東などの華北諸藩鎭に擴大する鐵勒・ソグド等諸族の樣相を的確に映し出す事件である。この亂から見える華北諸藩鎭の鐵勒部落の動向を探り、後にどのように展開していくかを檢討することで、唐末期の代北集團に含まれた遊牧軍團がどのように構成されたのかを探ることが可能になる。

朱泚の亂の首魁となった朱泚は幽州昌平の人で、大曆三年（七六八）に朱希彩が盧龍軍節度使になると、朱泚は朱希彩と同姓であったために信任されて頭角を現し、大曆七年（七七二）十月には幽州盧龍軍節度等使となる。

朱泚は河朔諸鎭の中で最も早く長安に入覲し、長安に留まることを望んだため、大曆九年をもって弟の朱滔が盧龍軍節度留後となった。ところが、建中三年（七八二）に朱滔が反亂を企て、朱泚と密かに謀ろうとしたことが發覺したため、朱泚は長安に留め置かれる。ついで建中四年（七八三）十月には、涇原の兵が叛して朱泚を迎えて長安を占領し、德宗

（在位七七九―八〇四）が奉天（現在の陝西省乾縣、長安の西北約七〇㎞）に逃れる事態が發生した。朱泚は涇原の軍と共に長安を占領すると大秦皇帝を自稱して應天と改元し、朱滔を皇太弟に立てた。ここに、朱滔らによる河朔の聯合軍と涇原軍を主力とする朱泚の勢力とが合流し、唐王朝を搖るがす大反亂に發展していく。(16) 亂の末期には、朝廷を助けて功績が高かった前朔方節度使で當時は河中節度使であった李懷光（靺鞨）が朱泚と通じて叛亂を起こし、河中に割據した。唐朝廷はこれに對して中書令の渾瑊（鐵勒）、河東節度使馬燧、鐵勒系阿跌部の李光進兄弟、鎭國軍節度使の駱元光（ソグド）、昭義節度使の李抱眞（ソグド）らを總動員して鎭壓する。

朱泚の亂は、建中四年に涇原藩鎭兵が反亂を起こして朱泚を擁立して長安を占據してから、翌興元元年六月に朱泚が殺害され、七月に反亂が鎭壓されて德宗が長安に歸還するまで、複雜な樣相を示している。今、『奉天錄』や『通鑑』、任育才氏の「奉天定難日譜」によりつつ時系列順に概要を示すと、【表一】のようになる。本表を一覽して氣づくのは、安史の亂の降將を中心とする叛軍側に非漢族が多いだけでなく、官軍側の軍將も、中核的役割を果たした人々に鐵勒・ソグド・吐蕃・靺鞨など非漢族の割合が高いことである。

表一　朱泚の亂の主な出來事（非漢族はゴチックで表示。傍線は叛軍側の人物を示す）

年月日	事項	出典
建中四年十月二日（七八三）	詔して涇原の兵を發し、東して**哥舒曜**の援に赴かしめんとす。	日、四一頁
建中四年十月三日	涇原の兵、京師を過らんとして亂を作す。德宗、出でて奉天に幸す。	日、四四頁
建中四年十月四日	德宗、奉天に至る。 **渾瑊**、家僕數十騎と與に夾城より北門に入り、後殿と敢死の士を收集し、行在に奔る。 朱泚、反逆し、竊かに長安に據る。	日、四七頁 奉、三三頁 日、四八頁

表一　朱泚の亂の主な出來事（非漢族はゴチックで表示。傍線は叛軍側の人物を示す）　続き

年　月　日	事　項	出　典
建中四年十月五日	德宗、**渾瑊**を行在都虞候と爲し、戰備に力籌せしむ。	日、五〇頁
建中四年十月六日	朱泚、長安の城門を閉め、朝官の出入を許さず。	日、五七頁
建中四年十月八日	朱泚、大秦皇帝を自稱し、應天と改元す。	日、六三頁
建中四年十月九日	**李希烈**、襄陽を陷れ、**哥舒曜**、洛陽に走る。	日、六五頁：舊、三七頁
建中四年十月十日	朱泚、自ら將に奉天に逼らんとす。	日、六八頁
建中四年十月十一日	**李懷光**、朔方の衆を帥いて長安に赴く。馬燧・李芃は兵を引きて河東・河陽に歸す。**李抱眞**は臨洛に屯す。	日、六九頁：鑑、七三六頁
建中四年十月十二日	**論惟明**・韓遊瓌、退きて奉天を守らんとす。	日、六九頁
建中四年十月十三日	朱泚、奉天に逼り、官軍と城下に交戰す。	日、七三頁
建中四年十月十九日	劉德信、朱泚の衆と見子陵に戰い、これを敗る。進みて東渭橋に屯す。	日、七九頁
建中四年十一月二日	靈武留後の杜希全、鹽州刺史の戴休顏、鄜坊節度使の李建徽ら、諸將、兵を合して入援せんとするや、賊の伏に遇い、潰え歸す。	日、九〇頁
建中四年十一月十一日	李晟、兵を東渭橋に宿せしむ。神策軍兵馬使の**尙可孤**、鎭國軍節度使の**駱元光**、入援す。河東節度使の馬燧、行軍司馬を遣して中渭橋に鎭せしむ。	日、九七―九八頁：奉、四二頁
建中四年十一月二〇日	朔方節度使の**李懷光**、朱泚の兵を醴泉に敗る。賊、圍みを解きて去る。朱泚、卻きて長安を守る。	日、一〇四―一〇七頁：奉、三九頁

表一　朱泚の亂の主な出來事（非漢族はゴチックで表示。傍線は叛軍側の人物を示す）　続き

年月日	事項	出典
興元元年一月一日（七八四）	**李希烈**・李納・田悦・**王武俊**の官爵を以て初めの如くす。奉天扈從の將士は竝に「奉天定難功臣」の稱號を賜う。朱泚、國號を「大漢」に更え、「天皇」と改元す。**李希烈**、卽位し、國號を「大楚」とし、「武成」と改元す。	日、一二六頁：奉、四七四頁 日、一三五頁 日、一三五頁：鑑、七三二頁
興元元年二月二六日	**李懷光**叛し、德宗、梁洋に蒙塵す。	日、一八二頁
興元元年三月十三日	**李懷光**と檢校右僕射・李晟、咸陽附近に對峙す。この日、**李懷光**、營を燒き走りて河中に歸る。	日、一九〇―一九二頁：奉、五五頁
興元元年四月十日	**渾瑊**、吐蕃の將**論莽羅**と與に朱泚の軍を武功に破る。	日、二一〇頁
興元元年五月六日	昭義節度使の**李抱眞**・河東節度使の馬燧・成德軍節度使の**王武俊**、朱滔を經城に破る。朱滔、遁げて幽州に歸る。	日、二三九頁
興元元年五月二八日	右僕射李晟、金商節度使の**尙可孤**、鎭國軍節度使の**駱元光**、神策制將の高秉哲、潼關大使の唐朝臣ら、東渭橋より終南山に至るまで、南北布兵す。李晟、苑の東北角より垣を壞して苑中に入る。**渾瑊**、戴休顏と與に咸陽を克す。韓遊瓌、朱泚を涇州に追う。	日、二三八頁：奉、七〇頁 日、二四六頁
興元元年六月五日	韓旻ら、朱泚を斬り、涇州に至りて降る。	日、二四九頁
興元元年七月十三日	德宗、長安に還る。	日、二六九頁

〔出典〕日：「奉天定難日譜」（任育才〔一九七〇〕）、奉：『奉天錄』、舊：『舊唐書』、鑑：『資治通鑑』。（日時および事項は「奉天定難日譜」に依據し、非漢族の動向を追跡できる史料を補って作成）

第二節　華北諸藩鎮の鐵勒・ソグド集團

叛軍側の節度使が契丹・靺鞨・高麗といった出身であり、配下に多數のソグド人が存在することは、陳寅恪氏以來繰り返し指摘されている。陳氏は朱泚と朱滔は「胡化漢族」であり、非漢族と何ら變わりないと指摘する。表を揭げるに留める【表二】[17]。

表二　叛軍側節度使

	節度使	出身	姓名	在職年次	出典
1	盧龍節度使	—	朱泚	七七二—七七四	方4、五五四頁
		—	朱滔	七七四—七八五	方4、五五四—五五六頁
2	成德節度使	奚	王武俊	七八二—八〇一	方4、五七九—五八二頁
3	平盧節度使	高麗	李納	七八二—七九二	方3、三三四—三三六頁
4	淮西（淮寧）節度使	靺鞨	李希烈	七七九—七八六	方8、二二五—二二六頁

〔出典〕方：『唐方鎮年表』中華書局、一九八〇年

次に官軍側に見える非漢族の事例を示す。朱泚の亂では叛軍と官軍が頻繁に入れ替わる。例えば王武俊などは初め叛軍側であったが、建中四年には朝廷に歸屬した。奉天の德宗を救援して功績が高かった李懷光は、興元元年には河中をもって叛旗を翻した。ここでは全體像を摑むために主要人物のみを【表三】に提示する。

【表三】からは華北地域において多數の非漢族が節度使や州刺史・神策軍に進出していることが明らかである。その左右の多くがソグド人や北方遊牧系の人物だったという李懷光（朔方節度使・河中節度使）[18]や、ソグド人の駱元光（李元諒、鎭國軍節度使）、吐蕃の論弓仁の子孫である論惟明（鄜坊節度使）、疏勒王の子孫である裴玢（鄜坊節度使）、李寶臣に仕えた契丹出身の張孝忠やソグド人の康日知[19]、鮮卑系の尙可孤などが存在する。このうち、本稿で扱う複數の遊牧部族が、後に

沙陀と關わりを持つことになる。

表三　官軍側非漢族主要人物

	出身	姓名	官職	出典
1	渾	渾瑊	朔方左留後→振武節度使（七七九）→檢校左僕射・同中書門下平章事・奉天行營兵馬副元帥、行在都知兵馬使、檢校司徒・兼中書令（七八四）→朔方節度使、侍中（七八四）→河中節度使（七八四）→中書令（七九八）	舊134、渾瑊傳
2	突騎施	哥舒曜	龍武大將軍→東都・汝州行營節度使（七九四）→河南尹→右驍衛上將軍	新135、哥舒曜傳
3	ソグド	李抱眞	昭義節度使（七七六－七九四）→檢校左僕射・平章事（七八四）→贈太保（七九四）	舊132、李抱眞傳
4	靺鞨	李懷光	朔方節度使（七八〇－七八四）・河中節度使（七八〇－七八四）	舊122、李懷光傳
5	ソグド	駱元光	鎭國軍副使→潼關防禦・鎭國軍節度使（七八四）→檢校尚書右僕射（七八四）→右金吾衛上將軍（七八七）→隴右節度使（七八八）	舊144、李元諒傳
6	吐蕃	論惟明	右金吾衛大將軍→鄜坊節度使（七八六）	陸贄集9・元和姓纂9
7	疏勒	裴玢	金吾將軍→忠義郡王（七八四）→（鄜坊）都虞候（七八六）→坊州刺史（七八五）→鄜州刺史・鄜坊節度使（八〇四）→山南西道節度使（八〇八）	舊146、裴玢傳
8	契丹	張孝忠	成德軍節度使（七八一）→義武軍節度使（七八二）→同平章事（七八四）	舊141、張孝忠傳
9	ソグド	康日知	深趙都團練觀察使（七八二）→奉誠軍節度使（七八四）	新148、康日知傳
10	鮮卑	尙可孤	御史中丞（七八三）→檢校工部尙書・神策京畿渭南商州節度使（七八四）→檢校右僕射・馮翊郡王（七八四）→贈司徒（七八四）	舊144、尙可孤傳
11	阿跌	李光進	不明→代州刺史（八〇〇）→振武節度使（八一〇）→靈武節度使（八一三）	舊161、李光進傳
12	阿跌	李光顔	不明→忠武軍節度使（八一四）→河東節度使・侍中（八二五）	舊161、李光顔傳
13	舍利	舍利葛旃	不明→贈工部尙書	山8・全714、李光進碑

〔出典〕舊：舊唐書、新：新唐書、山：『山右石刻叢編』、全：全唐文

【表三】のうち、皋蘭州都督を兼ねる渾瑊や雞田州部落の李光進・李光顔兄弟などは、唐初に設置された羈縻州に由來する人物である（第二章三節參照）。また、李抱眞の家系は唐初の功臣であるソグド人の安興貴の末裔で、唐初から代々河

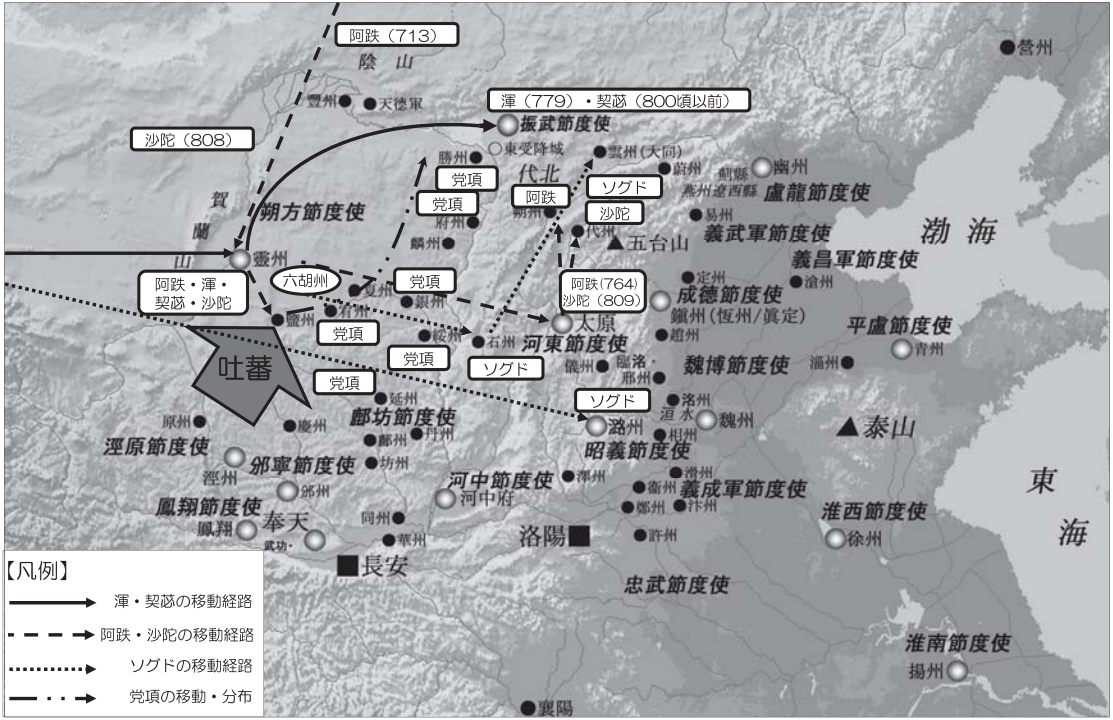
西におり、「家業」の牧馬を以て唐に仕えていたことが指摘されている。[20] 安史の亂後の唐王朝は、羈縻州系統の部落首領が多數起用される體制になっていたことを示しており、朱泚の亂はこのような羈縻州系統の部落首領を動員して鎭壓されたのであった。

こうした唐初に設置された羈縻州に由來する人物が中央政界や藩鎭の重鎭になっていた頃、彼らの故鄕である羈縻州部落は、一時期靈武に本據を置き、ついで河南と呼ばれた河曲部の北部を通り、阿跌部は七六四年頃[21]に、渾部は七七九年頃と、徐々に代北・河東に移動しつつあった。【地圖】はこうした非漢族のうち、本稿で扱う鐵勒・ソグド・党項等の移動の經路と分布を圖示したものである。

第三節　吐蕃の壓力と鐵勒・党項の東遷

これらの遊牧系部落とほぼ同時期に、同樣の動きを見せる集團が存在する。それは、沙陀・契苾・吐谷渾などの「代北五部」である。このうち、少なくとも契苾部落は、皐蘭州や雞田州と同樣に唐初に設置された羈縻州である賀蘭州の系譜をひく集團で、この時もなお賀蘭都督を世襲する契苾氏に率いられていた。契苾部と吐谷渾部は、靈武からオルドスを經由して、八〇〇年頃までに代北に移動する。[22] 沙陀突厥は吐蕃の影響下にあったが、元和四年（八〇九）に范希朝に從って河東節度使の下に移り、長期間にわたって阿跌部の李光顔の指揮を受ける。この他に、党項やソグド人にも同樣の動きがあったことが、岡崎精郎・周偉洲兩氏や森部豐氏によって指摘されている。[23] すなわち、鐵勒系・党項・ソグド系を含めた遊牧民の大移動が展開されていたのである。そして東遷した遊牧部族の中から擡頭した沙陀突厥が、當該領域內に八世紀以來存在した鐵勒系・ソグド系・党項などの部落を內側に取り込み、九世紀の後半に政治的大勢力へ成長していく。

このような東遷が起こった直接の要因としては、吐蕃の侵入の激化を想定することができる。唐朝は朱泚の亂の鎭壓のために吐蕃の兵力も借りており、渾瑊が吐蕃と共に朱泚の軍を破った（【表二】）。しかしその後、吐蕃軍が党項の據る夏



地圖　渾・契苾・阿跌・沙陀・党項・ソグドの移動

州を攻撃し刺史であった党項の拓抜乾暉を追い、鹽州・銀州を攻撃し、貞元三年（七八七）には靈武近郊の鳴沙を占據しており、これに對して渾瑊・駱元光（李元諒）が經略に當っている。[24] 吐蕃の侵入は『舊唐書』卷一九六下、吐蕃傳下によると「蕃軍、頃年朱泚の衆を武功に破るも、未だ報償を獲ず、來たる所以なるのみ」といい、朱泚の亂鎭壓への援助に對する見返りを求めるものであった。このような鹽州・銀州から靈武一帯の緊迫した情勢が、党項のみならず靈武に本據を置いていた契苾部落や吐谷渾部落が東遷する直接の契機になった可能性が高い。この情勢に渾部落を率いる渾瑊やソグド人の駱元光らが一貫して對處しているのは、農牧境域地帯に安置された遊牧勢力が唐朝の要請を受けて邊防に動員されたものと考えられる。[25]

周偉洲氏の研究によると、安史の亂後には既に內徙した党項の東遷が起こっており、至德年間（七五六―七五八）から永泰元年（七六五）まで、およそ一〇年間にわたって、隴右にいた党項が慶州・鹽州などに次々に遷っていく。唐王朝は、吐蕃が慶州・鹽州の党項を離叛させるのを防ぐために、永泰元年（七六五）に党項部落をさらに銀州の北・夏州の西および綏州・延州などに遷したといい、吐蕃はこのような党項の本據地を攻撃したのである。[26] 一方、岡崎精郎氏もまた、永泰初以來、党項が豐州・天德・振武からオルドスの廣い地域に散居していたことを明らかにされている。[27] 振武（單于都護府）の党項・室韋に對しては、范希朝が振武節度使であった元和元年（八〇六）に對策を行っていたこと、八四〇年のウイグル帝國崩壞によって烏介可汗がウイグルを率いて唐の北邊に至った時に、沙陀三部落・契苾・拓抜部落が唐側の軍事力として參戰していたことを指摘された。党項は、複雜な經緯を辿りながら東遷を繰り返し、九世紀半ばには、李德裕の『會昌一品集』卷一六所收の「請先降使至党項屯集處狀」（會昌六年）に、「党項は麟・府・鄜・坊より太原に至るまで、偏く河曲に居す」といい、振武節度使管轄下の麟州・府州から、鄜州・坊州を經て太原に至るあらゆる場所に屯集するようになっていった。[28]

第二章　八―九世紀の華北の鐵勒集團

第一節　沙陀の東遷と興起

沙陀は、貞觀中に唐に歸屬した後、七〇〇年頃には甘州方面に移動した[29]。貞元中（七八五―八〇五）には、吐蕃の勢力伸長に伴って沙陀部七千帳が吐蕃に歸屬したが、吐蕃は沙陀を甘州から河外に徙そうとしたため、これを嫌った沙陀は、沙陀盡忠と朱耶執宜が謀って烏德鞬（オテュケン）山に逃げ、そこから吐蕃と戰いつつ靈州に至って唐朝に歸屬し、鹽州に安置された（八〇八）。その翌年には靈鹽節度使范希朝が河東節度使に移鎭するのに伴って河東に移動する。范希朝はそのうち千二百騎を精選して沙陀軍と號し、その餘衆は定襄川に置き、朱耶執宜は神武川の黃花堆を保って「陰山沙北沙陀」と號したという。河東に移った沙陀の元には、鳳翔（現在の陝西省寶雞市）・興元（現在の四川省漢中市）・太原を經由して歸屬した者も合流して大きな勢力となっていく。

『新唐書』卷二一八、沙陀傳の記述から判明するところでは、沙陀は、河東に移動した翌年からめざましい活躍を見せることになる。沙陀傳の記述から、范希朝とともに河東に移動した後の沙陀の動向を抽出したのが【表四】である。【表四】から判明する重要な點は、沙陀が河東に移動した八〇九年から八二一年の鎭州討伐まで、李光顏の管轄下にいるか、あるいはともに軍事行動を取っているということである。八三〇年には李光顏の軍ではなく河東節度使の下に置くことが明記されている（本章第三節參照）。八三〇年に朱耶執宜が代北行營招撫使に、八四四年に朱耶赤心が代北軍使となった沙陀は、龐勛の亂の鎭壓や黃巢の亂の鎭壓を足がかりに、唐末の大勢力へと成長していく。

この地域には、沙陀が移動してくる前に既に阿跌や渾部、契苾部など、重要な鐵勒系部落が多數存在しており、沙陀はそのただ中に移動してきたのである。そこで次に、沙陀とこれらの鐵勒系部落との關係を見てみたい。

表四　河東移動後の沙陀の軍功

年次	内容	統括者
元和五（八一〇）	・鎮州（王承宗）を討伐。**朱耶執宜**は軍七百を以て前鋒となり、鎮兵解けるや、**蔚州刺史**に進む。	李光顔軍
元和八（八一三）	・回鶻、磧南を過り、**朱耶執宜**に詔して**天德**に屯せしむ。	不明
元和九（八一四）	・淮西の吳元濟を討伐。**朱耶執宜**に詔して**李光顔**に隷せしむ。元濟平ぐや、檢校刑部尚書を授けられ、なお**光顔の軍**に隷す。	李光顔軍
長慶元（八二一）	・鎮州を討伐。**沙陀**を動員して、易定の軍と掎角せしむ。**朱耶執宜**入朝し、宿衛に留め、金吾衛將軍に拜す。	李光顔軍
太和四（八三〇）	・柳公綽、河東を領す。奏せらく、**陘北の沙陀**は素より九姓・六州の爲に畏れらる。部人三千を料して北邊を禦ぎ、代北行營と號す。**朱耶執宜**に陰山府都督・代北行營招撫使を授け、**河東節度**に隷す。	河東節度使
開成四（八三九）	・回鶻が磧口を徑て榆林塞に抵る。宰相掘羅勿は良馬三百を以て**朱耶赤心**に遺り、共に彰信可汗を攻めるを約す。	不明
會昌二―三（八四二―八四三）	・**（河東）節度使劉沔**、**沙陀**を以て回鶻を殺胡山に擊つ。	河東節度使
會昌四（八四四）	・**潞**を伐ち、劉稹を誅す。**朱耶赤心**に詔して代北騎軍三千を率いて**石雄**に隷して前軍と爲す。潞州平ぐや、朔州刺史に遷り、**代北軍使**と爲す。	石雄
大中元（八四七）	・吐蕃、黨項及び回鶻の殘眾と合して河西を寇し、太原の王宰、代北諸軍を統べて進討す。沙陀常に深く入り、諸軍に冠たり。**朱耶赤心**、蔚州刺史・雲州守捉使に遷す。	王宰
咸通十（八六九）	・龐勛の亂。**義成の康承訓**に詔して行營招討使と爲し、**朱耶赤心**、突騎三千を以て從う。勛平ぐや、大同軍節度使に進む※。	義成節度使康承訓
咸通十（八六九）	・回鶻、榆林を襲擊し、靈・鹽を擾す。**李國昌**に詔して鄜延節度使と爲す。	
乾符元（八七四）	・回鶻、又た**天德**を寇す。**李國昌**を**振武節度使**に徙し、檢校司徒に進む。	

〔出典〕『新唐書』卷二一八、沙陀傳、六一五三―六一五六頁　※大同節度使は八七八年に設置。防禦使か。

第二節　振武の鐵勒渾部と契苾

渾瑊は、徳宗が奉天に蒙塵すると直ちに家僕数十騎を連れて奉天に至り、奉天の防衛に最も功績があった。興元元年には朱泚を追って涇州に至り、その首を献じるなど朱泚の亂の鎮壓に最も功績のあった人物である。彼は『舊唐書』巻一三四、渾瑊傳［三七〇三頁］に、

渾瑊は、皋蘭州の人なり、本と鐵勒九姓部落の渾部なり。高祖の大俟利發、渾阿貪支は、貞觀中に皋蘭州刺史たり。曾祖元慶、祖大壽、父釋之、皆な代よ皋蘭都督たり。

といい、『新唐書』巻七五下、宰相世系表［三三七九頁］[30]に、

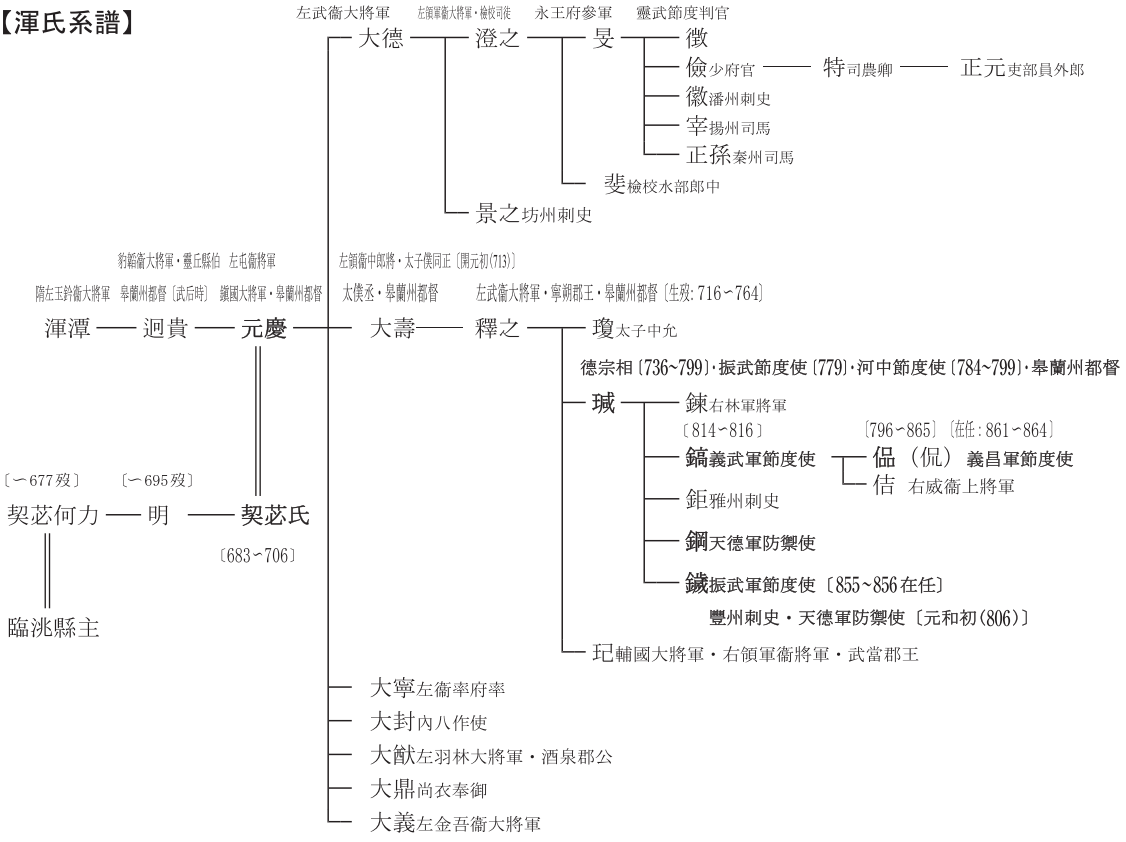
渾氏…迴貴より瑊に至るまで、世よ皋蘭州都督を襲う。

という、鐵勒系の渾部に置かれた羈縻州である皋蘭州の出身であり、唐初の人物と考えられる高祖の迴貴から渾瑊に至るまで、代々皋蘭州都督を帶びていた。『新唐書』巻二一七上、回鶻傳上および『舊唐書』巻一九五、迴紇傳の記載によると、武則天の時期には回紇・契苾・思結・渾の四部が、甘州・涼州の間に安置されていた[31]。

『奉天錄』巻一には渾瑊が「家僕數十騎」を連れて長安で「後殿と敢死の士を收集」［二三頁］してから奉天の行在に驅けつけたことが記されている。この「家僕」は、『新唐書』巻一五五、渾瑊傳では「帝の奉天に狩するや、瑊、家人の子弟を率いて以て從う」［四八九三頁］[32]と記されており、騎馬の「家僕」や「家人子弟」は皋蘭州の部民である可能性が高い。

まず、渾部ともう一つの羈縻州である賀蘭州の契苾部との關係、そして渾部の所在を示すために、渾瑊の系譜を示してみよう。『新唐書』巻七五下、宰相世系表［三三七九―三三八三頁］および「渾瑊碑」[33]・「渾偘碑」[34]等によると、その大まかな世系は【渾氏系譜】のようになる。岑仲勉氏によると、渾潭の帶びた左玉鈐衛大將軍という職は隋代には存在せず、

【渾氏系譜】


左武衛大將軍
大德
左領軍衛大將軍・檢校司徒
澄之
永王府參軍
旻
灑武節度判官
徵
儉少府官
特司農卿
正元吏部員外郎
徽潘州刺史
宰揚州司馬
正孫秦州司馬
斐檢校水部郎中
景之坊州刺史
豹韜衛大將軍・靈丘縣伯
左毛衛將軍
左領衛中郎將・太子僕同正〔開元初(713)〕
隋左玉鈐衛大將軍
皋蘭州都督〔武后時〕
讓國大將軍・皋蘭州都督
太僕丞・皋蘭州都督
左武衛大將軍・寧朔郡王・皋蘭州都督〔生歿:716~764〕
渾潭
迴貴
元慶
大壽
釋之
瓊太子中允
德宗相〔736~799〕・振武節度使〔779〕・河中節度使〔784~799〕・皋蘭州都督
琎
鍊右林軍將軍
〔814~816〕
〔796~865〕〔在任:861~864〕
鎬義武軍節度使
侃(侃) 義昌軍節度使
佶 右威衛上將軍
鉅雅州刺史
鋼天德軍防禦使
鐵振武軍節度使〔855~856在任〕
豐州刺史・天德軍防禦使〔元和初(806)〕
玘輔國大將軍・右領軍衛將軍・武當郡王
〔一677歿〕
〔一695歿〕
契苾何力
明
契苾氏
〔683~706〕
臨洮縣主
大寧左衛率府率
大封內八作使
大猷左羽林大將軍・酒泉郡公
大鼎尚衣奉御
大義左金吾衛大將軍

領軍衞が龍朔年間に戎衞とされ、光宅元年（六八四）に玉鈐衞とされ、神龍年間に再び領軍衞に戻されたものであり、迴貴の帶びた豹韜衞大將軍も同年に威衞から豹韜衞に變えられ、神龍年間に復されたものであるから、この二人は武則天時期の人であるという。(35)

渾瑊が率いる皋蘭州と、後に「代北五部」として沙陀集團の中核を擔うことになる契苾部落とは、婚姻關係を通じて友好關係にあった。これを證明する墓誌が、近年寧夏回族自治區の青銅峽市で發見された「渾公夫人契苾氏墓誌銘」(36)である。以下に書き下しを示す。

大唐左屯衞將軍皐蘭州都督渾公夫人契苾氏墓誌銘幷びに序

夫人、諱は□、姓は契苾氏、其の先は陰山の人なり……。曾祖扶は、隋の右武衞大將軍・賀蘭州都督なり。祖何力は、唐の輔國大將軍・右金吾衞將軍・駙馬都尉・賀蘭州都督・申國公なり。父明は、唐の鎭軍大將軍・行左屯衞將軍・賀蘭州都督・涼國公なり。……神龍二年十月廿六日、疾に遘いて皐蘭州の官舍に終る、春秋廿有四。粵に景雲二年四月九日、窆を賀蘭山の南原に遷し、先塋に祔す。禮なり。

墓主である渾公夫人の契苾氏は、唐初に李世民に仕えて蕃將として有名な契苾何力の孫である。(37)契苾氏の夫である皐蘭州都督については記述がないが、契苾氏の歿年が七〇六年、渾釋之の生年が七一六年であることから、釋之より前の世代に當たる元慶か大壽のどちらかに限定される。そのうち、渾大壽については『舊唐書』卷一三五、渾瑊傳に開元初（七一三）に長安で左領衞中郎將（正四品下）・太子僕同正（從四品上）を歷任したことが記錄されている［三九〇三頁］。一方で、墓誌銘には契苾夫人の夫である渾公は七一一年の時點でより高位の左屯衞將軍（從三品）であったことが明記してあるため、契苾夫人の夫の皐蘭州都督は渾大壽ではなく渾元慶と推定できる。年齡を考えると渾大壽は契苾氏の所生とは考えにくいものの、系譜の上では契苾氏は渾瑊の曾祖母に當たる。契苾氏は「契苾通墓誌銘」によって唐末まで賀蘭州都督を世襲していたことが判明しており、契苾夫人はその直系の生まれである。皐蘭州都督渾公との婚姻關係は、部落間の友好關

係あるいは同盟關係を示すと見て間違いない。

墓誌が發見された寧夏回族自治區の青銅峽市は唐代の靈武の近傍に立地することから、神龍二年（七〇六）年當時、皐蘭州が靈武附近に置かれていたことが判明する。

その後、渾釋之は天寶五載（七四六）に靈武で防秋に當たり、廣德中（七六三―七六四）に靈武で戰歿していることから（『新唐書』卷一三四、渾瑊傳［三七〇三頁］）、少なくとも七六〇年代までは靈武にいたものと想定できる。渾瑊は一一歳で邊部に仕え、朔方軍の軍事活動に從いつつ靈州左司馬、邠州刺史を歷任した。この頃は「渾瑊碑」に「其の間、地を河曲に開き、以て九蕃を靜む」というように、渾瑊と所部である皐蘭州は河曲（オルドス）で大きな勢力を持つようになっていた。

このような婚姻關係に基づく友好關係が、實際の軍事行動に表れた事例として、渾部と契苾部が共同で軍事行動に當たったことを示す「河西破蕃賊露布」（『文苑英華』卷六四八、三三三三頁）がある。これは開元二五年（七三七）に河西節度使の崔希逸が吐蕃を打破した戰役の露布であるが、この中で唐側の布陣を示す文章中に、

又た大將軍渾大寧・契苾嘉賓をして各の步兵を領せしめ…三水の賊境において掎角を爲さしむ。

と見える。渾大寧は前出の墓主契苾氏の夫である渾元慶の子であり（【渾氏系譜】）、契苾嘉賓は契苾通の祖父に當たる。[38] 墓主の契苾氏が若くして歿してから既に三〇年を經ているが、渾部と契苾部はその友好關係を維持し、共に軍事行動に參加していたことが見て取れる。

契苾部については、筆者はかつて振武節度使「契苾通墓誌銘」および「契苾公妻何氏墓誌銘」の分析[39]を通して、唐初に唐に歸附し、河西回廊に安置された契苾部落が、おおよそ八〇〇年頃までには、河西回廊から靈武を經て振武軍に移動していったこと（第一章二・三節參照）、契苾部落もソグド人とのつながりを持ち、吐谷渾・契苾・沙陀三部落は唐末において「五部」と總稱されており、九〇〇年頃には吐谷渾とともに沙陀集團の中に取り込まれ、沙陀集團の中心勢力を形成し

たことを論じた。では、渾部はどのような經緯をたどったのであろうか。

渾瑊は大曆一三年（七七八）に郭子儀の下で單于副都護・振武軍使となって回鶻（ウイグル）を防ぎ、大曆一四年（七七九）には朔方節度使の縮小と四分割に伴って、單于大都護・振武軍・中東二受降城・鎭北及綏銀麟勝等軍州節度營田使となり、振武節度使となった[40]。その後すぐに左金吾衞大將軍・左街使に充てられ、興元元年（七八四）三月には靈州都督、靈鹽豐夏等州定遠西城天德軍節度使を兼ね、朔方邠寧振武等道兼永平軍奉天行營馬副元帥に充てられている。主に振武での軍事行動に當たっているのは、渾瑊の率いる皐蘭州の渾部がこの地域で勢力があったためであろう。蘇航氏も指摘するように、この頃には皐蘭州の部民は振武から代北に入っていったようである。渾部の移動の經緯については、渾瑊の孫にあたる渾偘の神道碑（「渾偘碑」）に述べられている。

公、諱は偘、字は復貴、その先は姜姓の後にして、漢郡渾（ママ）邪王の裔なり。始め崤北に居り、後に河南に遷り、今は代人と爲り、山西の右族と爲る。

渾偘は、碑文によると咸通六年（八六五）に六九歲で死去したので、生年は貞元十三年（七九七）である。渾偘自身は長安に葬られたが、渾氏は唐に降附した後に河南（河曲部、オルドス）に遷り、當時はすでに代人で山西の右族であったという。

今、朱泚の亂以降に振武節度使となった鐵勒・ソグド系武人を纏めると【表五】のようになる。【渾氏系譜】と合わせて見ると、渾瑊が七七九年に振武節度使となった後、天德軍防禦使となった渾鋼があり、大中九年（八五五）には二人目の振武節度使である渾鐵を出している[41]。振武節度使は、渾瑊を嚆矢として、朱泚の亂に參與した阿跌部、さらにソグド人軍將、契苾部、そして沙陀の李國昌や李克寧が次々に節度使となる、沙陀突厥搖籃の地であった。渾瑊・李（阿跌）光進の間は約三〇年開いているが、この間は契苾通が振武の都知兵馬使として在任した期間に當たる〔第三節參照〕。會昌年間以降は、米暨以降次々に非漢族の節度使が誕生していることを見ると、八四〇年に發生したウイグル帝國の崩壞に起因

する烏介可汗を中心とするウイグルの南遷と、ウイグル對策に貢獻した吐谷渾・契苾・沙陀三部落の功績が[42]、ソグド・契苾・沙陀らが節度使に進出する直接の契機となっていることが想定できる。換言すれば、唐初の功臣の子孫であり、唐王朝宗室の血も受け繼ぎ、渾部とも姻戚關係にあった契苾部でも、唐王朝への殊勳がなければ節度使への進出は困難だったのだろう。

表五　振武の鐵勒・ソグド系節度使

	年次	姓名	備考
1	大曆一四年（七七九）	渾瑊（渾）	舊書、紀、十一月庚戌、以代州刺史阿跌光進爲單于大都護・振武麟勝節度支營田觀察押蕃落使
2	元和五年（八一〇）―元和八年（八一三）	阿跌光進→李光進	
3	會昌六年（八四六）―大中元年（八四七）	米暨（ソグド）	
4	大中元年（八四七）―大中二年（八四八）	史憲忠（奚、ソグド）	
5	大中六年（八五二）―大中八年（八五四）	契苾通（契苾）	
6	大中九年（八五五）―大中一〇年（八五六）	渾鐵（渾）	渾瑊の子
7	乾符元年（八七四）―乾符五年（八七八）	李國昌（沙陀）	
8	中和元年（八八一）―中和四年（八八四）	契苾璋（契苾）	
9	景福元年（八八九）―天復三年（九〇三）	石善友（ソグド）	石善達と同輩か
10	天祐元年（九〇四）―天祐四年（九〇七）	李克寧（沙陀）	舊史、李克寧傳、「武皇之季弟也」

〔出典〕『唐方鎮年表』卷一、一六一―一八三頁。舊書：舊唐書、舊史：舊五代史

一方で、唐王朝に對する殊勳を擧げ得たということは、吐谷渾・契苾・沙陀三部落がこの地で既に確固とした地歩を築き、軍功を擧げうる武力集團になっていたということである。河東・代北において、あまたの鐵勒系の遊牧民が大きな力を持つ最初の基礎を形作ったのが、朱泚の亂で殊勳をあげた渾・阿跌といった勢力の節度使就任や、これと表裏をなす配下の鐵勒系羈縻州民の移動であった。渾氏が宰相を出すほどに勢力を得た背後には、華北諸藩鎭における鐵勒系羈縻州民

の移動という趨勢が隠されており、ここで實力を蓄えた鐵勒系部落の羈縻州が後に沙陀突厥に統合されていく遊牧勢力の中に含まれていたのである。渾部が沙陀に吸収されていったことを示す記事が、『通鑑』巻二五五、中和二年（八八二）十二月條に附す『資治通鑑考異』巻二四所引の『後唐太祖紀年錄』「一六九頁」に殘されている（『四部叢刊』本による）。

初め、克讓、潼關に戰いて敗るるや、賊を南山に避けんとして、佛寺に隱れ、夜、山僧の爲に害せらる。紀綱渾進通、刃を冒して免がるるを獲、黃巢に歸す。

渾偘に遲れること二十數年後、すでに渾氏の人物が沙陀突厥と合流しているのが見て取れる。さらに、時代が下って『舊五代史』巻九八、安重榮傳に收める後晉の天福年間（九三六―九四四）の上奏文「一三〇二頁」には、

續きて準るに、生吐渾幷びに渾・奚苾・兩突厥三部落、南北して沙陀・安慶・九府等を將い、各の部族の老小領、幷びに牛羊・車帳・甲馬を領し、七八路より化を慕いて歸奔し、俱に五臺及び當府（成德軍）の地界已來（地界のこちら側）に至りて安泊す。

という記事が見える。渾部は、この時期までも契苾部落と行動を共にしている。また、吐谷渾・沙陀部落や、沙陀三部落の一つでありソグド系部落とされる安慶なども見えることから、その後五代に至るまで沙陀集團がまとまって行動していたと想定できる。また、非漢族出身者で振武節度使となった嗢矢が渾瑊であること、その後も渾氏の節度使が出ていることに鑑みると、渾氏とその配下の渾部に置かれた羈縻州である皋蘭州は、おそらくは渾瑊とともに代北に移動し、その後渾氏は「山西右族」となり、九世紀末には沙陀突厥と合流したと想定できる。

ここで一つの疑問が出てくる。渾部と阿跌部もまた、代北五部の一部である契苾部とよく似た性格を持っている。なぜ、渾部と阿跌部は唐王朝が把握する「代北五部」に含まれていないのだろうか。これについては、渾部と阿跌部は他の五部と異なり、中書令の渾瑊と侍中の李光顔を出した「宰相の家」であり、沙陀勃興前の早い時期から既に刺史や節度使として唐王朝の側から遊牧民の統御に關わっていたことを指摘したい。阿跌が沙陀を指揮する立場であったことは既に述べた

が、渾部もまた、元和年間のこととして、「元和中、延州の沙陀部、邊吏の貪に苦しみ、震擾して安まらず。李絳建言し、『宜しく才職の稱う者を選びて刺史と爲すべし』と。乃ち（渾）鎬を延州に任ず。」[43]という、沙陀を保護する立場であった。

第三節　河東・代北の鐵勒阿跌部と沙陀

近年の蘇航氏と山下將司氏の研究によって阿跌に關する研究が進められ、鐵勒系阿跌部に關する知見は大幅に增大した。[44]兩氏の研究によると、阿跌部が漠北にいた貞觀二一年（六四七）に羈縻州である雞田州部落が設置され、さらに開元元年（七一三）には靈州附近の囘樂縣に復置された。阿跌部の首領であった李良臣は朔方軍に隷しており、彼が寶應元年（七六二）年に卒すると、その子である李光進と李光顔兄弟は、姉の夫である舍利葛旃が河東節度使に仕えたことによって廣德二年（七六四）には太原に移動したという。また、森部豊氏が紹介した後晉の鷄田府部落長史「何君政墓誌」[45]に見える鷄田府が、阿跌部の雞田州と同じものであることも、蘇氏の研究によって明らかになった。

八〇九年に范希朝に從って東遷した當初の沙陀部落は、河東節度使の管轄下にあったものの、現實的にはこの阿跌部の下で李光顔の指揮を受ける立場にあった。【表四】に示した沙陀の動向からは、河東に移動後の沙陀は一八年にわたって李光顔の軍の下に置かれたことが窺える。蘇航氏は、李光顔が河東を離れてもなお河東蕃部を統率する形が繼續しており、阿跌部が河東蕃部を統率したのは戰時に限らないといい、李光進が代州刺史に任じられた際に石嶺鎭兵馬使・代北軍使も兼ねたことを指摘する。[46]この年代について、山下氏は貞元一六年（八〇〇）頃としている。

では、阿跌の李光進・李光顔兄弟は、平時はどのように沙陀を統率したのだろうか。その疑問を解く鍵となる、この間に具體的に沙陀部落を管した人物の名前が、『會昌一品集』に殘されている。『會昌一品集』卷一六所收の會昌四年三月十四日の日附を持つ「奏晉州刺史李丕狀　緣楊弁作亂時、李丕殺安義節之子」に、

右、安義節、沙陀の兵馬を管すること三十餘年、蕃人の心、最も讐怨を尙ぶに緣り、戰陣の際、固とより堤防し難し。[47]

とある。これは、會昌三年に河東都知兵馬使であった楊弁が軍亂を起こして河東節度使の李石を逐った時、當時の忻州刺史で、ウイグル討伐で石雄の副使となる李丕が、「蕃人」であり、三十餘年にわたって沙陀の兵馬を管していた安義節というソグド姓の人物の子を斬ったため、ウイグル征伐において沙陀を制御できないと述べている。三十餘年といえば沙陀が范希朝と共に河東に移動し、李光顔の指揮を受けていた時期から會昌四年（八四四）までの全期間にあたる。安義節が沙陀の兵馬を管した時の立場は不明だが、沙陀を統率する立場にあった雞田州の李光顔と關係する人物であった可能性が高く、また「蕃人」であることからソグド人である可能性が高い。この安義節については、長慶元年（八二一）七月に鎭州の成德軍大將の王庭湊討伐に參與した將校五九人を列擧した「裴度等承天題記」（以下、「承天題記」と略稱。『山右石刻叢編』巻八、四七－五三葉）にも、阿跌の李昌元や李季元と共に名前が見える［序列の［數字］と（　）は筆者による］。

十有二月…書記元輿に命じて其の從行の府□□□將校、凡そ五十九人を錄せしめ、承天軍西の石壁に列ぬ。［1］鎭州四面行營都招討・河東節度觀察處置・押北山諸蕃等使・太原尹・北都留守・司空兼門下侍郎平章事晉國公、裴度…（中略）…［15］次軍都知兵馬使・儀州刺史兼御史中丞、李昌元（李光進の嗣子）…（中略）…［17］右武略軍使兼監察御史、李季元（李光顔の長子）…（中略）…［27］右軍兵馬使□太子詹事、安義節。（後略）

『新唐書』巻二一八、沙陀傳［六一五五頁］によれば、長慶元年に行われた鎭州討伐には、沙陀も動員されており（【表四】）、朱耶執宜が李光顔と共に獅子奮迅の活躍をしたことが見えるが、「承天題記」には朱耶姓の人物は見えない。「承天題記」には名前を確認できない人物が六名おり、ここに含まれる可能性もあるが、安義節が「沙陀を管し」ていたのであれば、この安義節の配下に置かれていた可能性が高い。とすれば、阿跌による沙陀の統御は必ずしも直接統率下に置くのではなく、このようなソグド系の武人が介在していた可能性が高い。そして、他部落である沙陀の統率に關與していることや、阿跌李氏より下位ではあるとはいえ同樣に「承天題記」に列擧されていることから、このようなソグド系の武人は、安義節一人ではなく、有力な武力集團として存在していたと考えるべきであろう。(48)

李光進は元和四年（八〇九）から元和六年（八一一）まで代州刺史・代北軍使の官職を帯びていた。その後、李光進は靈武節度使を拜し（在任：八一三―八一六）、任地で歿した。その後、李光顔が忠武軍節度使から河東節度使に移った（在任：八二五―八二六）。一方の沙陀は、朱耶執宜が八二一年に宿衛に入ったものの、八三〇年に代北行營招撫使となり、河東節度使に隷することとなった。この間の沙陀に關する情報は限られるが、八三〇年時點ですでに陘北（陘嶺、句注山の北）で畏れられていたとすれば（【表四】）、八二一年以降も代北にあって阿跌の李光顔の統御を受けていた蓋然性が高い。とすれば、李光顔は河東節度使のまま歿したため、最後は河東節度使の指揮を受けていたことになり、唐王朝側がその形を追認したものといえる。次いで會昌年間（八四一―八四六）には朱耶赤心が代北軍使となった。この後、沙陀の朱耶氏は後々まで代州を本據地とし、李克用の墓も代州に存在する。[49] 李光顔の死去後の阿跌の根據地については確かなことは不明であるが、森部豊氏は後晉時期に鷄田府部落が存在した場所を雲・朔の間とし、[50] 蘇航氏は李光進・李光顔の時代に代州に移動したとする。[51] おそらく、沙陀と阿跌は、阿跌が沙陀を統御した時期から五代時期まで、長期にわたって近接する地點に住み續けていたのであろう。このような關係から、沙陀が代北で勢力をつけてくると李光進・李光顔の時代とは形を變えて沙陀と共に行動するようになり、前述の後晉の天福年間に代州で歿した鷄田州部落長史の墓誌は、その結果として殘されたと考えられる。[52]

代北における阿跌部の具體的な狀況については、李光顔の第四子の李誠元を朔州刺史に除する制から明らかになる。杜牧『樊川文集』卷一八「李誠元除朔州刺史制」[53]に、

> 敕す。銀青光祿大夫・檢校國子祭酒・前使持節都督勝州諸軍事兼勝州刺史・御史中丞・充本州押蕃落及義勇軍等使・上柱國李誠元。……長慶より已降、制置を怠り、西北の守帥、多く其の人に非ず、種落を侵虐し、厚く自ら封殖し、忿鷙の性をして、欺奪の苦しみに甘んぜざらしむるに至る。近者聚りて內寇を爲し、乃ち天下を騷動するに至る。……僉な曰く、誠元、家、本と北邊にあり、志氣は慷慨、將軍の子にして、頗る父の業を傳う。……深く國士たらん

と期し、家聲を頽す無かれ。檢校國子祭酒・使持節朔州諸軍事兼朔州刺史・御史中丞たるべし、散官・勳は故の如し。

これは使持節都督勝州諸軍事兼勝州刺史・充本州蕃落及義勇軍等使であった阿跌部の李誠元が大中五年（八五一）頃に朔州刺史を拜したことを示す[54]。李誠元は、李光顔が河東節度使在任中に歿した寶曆二年（八二六）時は朔州司馬で、朔州と緣が深い。

勝州刺史から檢討しよう。實は勝州刺史の歷代の就任者はよくわかっていない。「契苾通墓誌銘」の記錄によれば、通の父である契苾漪は「皇持節都督勝州諸軍事・勝州刺史・充本州押蕃落義勇軍等使・兼侍御史・贈鴻臚卿」であり、郁賢皓氏によればこれは元和中（八〇六―八二〇）のことという。次に勝州刺史になったことが判明するのはやはり契苾氏出身の契苾通（開成末（八四〇）頃）で[55]、さらに一〇年を經て勝州刺史となったのが阿跌の李誠元である。とすれば、これは當時の契苾部とほぼ同等の勢力を有しており、阿跌の李誠元の存在は、なお勝州や朔州の遊牧部落を統率する力があったことを示しているに他ならない。

次に、李誠元の前後に朔州刺史になった人物を擧げてみよう。【表六】によると、李誠元は代北軍使も兼ねる沙陀の李國昌の後に朔州刺史となっている。李誠元が朔州刺史を拜するとほぼ同時に、契苾通は振武節度使に昇任した。この時期の代北は振武の契苾、朔州の阿跌、蔚州の沙陀という配置になっており、當時は契苾部を筆頭に、鐵勒系・沙陀系部落がいずれも強い勢力を保持していたことを示している[56]。當時の阿跌部は、沙陀と拮抗する勢力として、代州・朔州附近で遊牧し、沙陀とも近い關係を保っていたのであろう。

では、振武節度使に進出する前は、契苾部は代北でどのような地位にあったのであろうか。鐵勒部落が州刺史レベルの地位にある時期の實力を示す事例として檢討してみよう。代北に移って間もない元和中（八〇六―八二〇）に契苾通の父の契苾漪が既に勝州刺史・押蕃落使となっているだけでなく、「契苾公夫人何氏墓誌銘」の誌文中に「始めその家に至るや、契苾公は乃ち振武の都頭（都知兵馬使）たり、權は萬餘の兵を握る」（第十行）といい、「伉儷たりてより四十餘年」と

表六　朔州刺史

	年次	氏名	出身	出典
1	會昌二―三年（八四二―八四三）	石雄	―	新書、本傳
2	會昌四―大中三年（八四四―八四九）	李國昌	沙陀	新書、沙陀傳
3	大中五年（八五一）頃	李誠元	阿跌	杜牧「李誠元除朔州刺史制」
4	大中一二年（八五八）	段威	―	舊書、宣宗紀
5	咸通一〇年（八六九）	李克修	沙陀	舊五代史、本傳
6	廣明元年（八八〇）	高文集	―	舊五代史、唐武皇紀、上
7	廣明元年（八八〇）	米海萬	ソグド	舊書、僖宗紀

〔出典〕『唐刺史考全編』巻九六、河東道　朔州、一三五四―一三五五頁

あることから、何氏夫人が嫁した八〇〇年より少し後には、既に振武の大勢力であったことがわかる。この時期について、契苾通墓誌銘では「都押衙・馬歩都知兵馬使」と見え、東受降城使に移るまで長期にわたってこの地位にあった。つまり、范希朝が節度使であった八〇〇年頃から阿跌の節度使時代を歴て、長期にわたって節度使のすぐ下で振武軍の軍務を統括していたのが契苾通であり、若年で任官したことを考えると、契苾部は渾部と共に既に相當の勢力を持っていたと想定できる。振武節度使となった契苾通が大中八年に七〇歳で卒すると、次いで渾瑊の子の渾鐵が振武節度使となる（大中九―一〇年）。渾鐵は元和初年（八〇六）には既に豊州刺史に任官していたことからも當時既に高齢であり、契苾通と同年配と考えられる。契苾部と渾部で立て續けに振武節度使となっていることは、渾部と契苾部の繋がりを示すと共に、代北地域での鐵勒系部落の強さを示している。すでに指摘されているように、後半期の唐王朝はその時々の領内に勢力を有する遊牧集團に統御を委ねる形で北邊を維持していた[57]。唐王朝は、こうした遊牧部落を統御する力を持ち、「任使已に熟す[58]」と思われた蕃將を各地に配することで、東遷を續ける鐵勒系や党項部落を統御し、北邊を維持しようとしたのである。

第四節　河東・代北の鐵勒部落出身者の任官地

代北へと移動した渾部や契苾部は、據點を代北に移しても、その勢力は代北に限られない。各地の部落を統御していた當時の遊牧首領にとっては、子息を各地に配置し、自らも各地で任官したことは、部落の勢力を反映するだけでなく、更に強化する效果があっただろう。山下將司氏は、沙陀や阿跌、突厥の例を取り上げて、『新唐書』卷二一八、沙陀傳［六一五五頁］にある「之を頃くして、（范）希朝、太原に鎭すれば、因りて沙陀に詔して軍を擧げて之に從わしむ。希朝、乃ち其の勁騎千二百を料り、沙陀軍と號し、軍使を置き、餘衆を定襄川に置く。執宜、乃ち神武川の黃花堆を保つ。」という記錄に基づき、「部落自體は河東北部に安置されて遊牧形態を維持する一方、選出された騎馬兵が首領に率いられて河東軍や忠武軍に從軍」していたことを指摘された[59]。また、【表四】を仔細に檢討すると、邊防への動員には二つのパターンがあることが判る。すなわち、部落を動員して別の人物の統率下で征伐へ從軍させる場合と、酋帥自身を軍使や州刺史または節度使に拜することによって、所部を率いて邊防に動員する場合とである[60]。とりわけ後者は、史料上はあたかも酋帥だけが任地に赴いたように書かれるが、例えば、元和八年には、回鶻が磧南を過ぎると朱耶執宜を天德に屯せしめており、咸通十年には回鶻が楡林を襲擊し、靈・鹽を擾したことによって李國昌を鄜延節度使に任じている。乾符元年には　回鶻が天德を寇したために李國昌を振武節度使に徙したという。これらの事例は明らかに沙陀の兵力によって回鶻に反擊することが目的であり、少なくとも沙陀の騎馬軍を率いていなければならず、實際は任地または別地からの動員かを問わず、所部以外の遊牧部落をも統御する必要があっただろう。つまり、從軍だけではなく各地への任官にも邊防上の意義があり、沙陀や阿跌部だけでなく、類似の性格を持つ渾部や契苾部もまた任官に際して選出された騎馬兵を率いたと想定する必要がある。

渾瑊は振武節度使・朔方節度使を經て河中節度使へ移鎭した。彼は、河中節度使であった李懷光が興元元年（七八四）

に叛したため、靈州大都督・朔方節度使・邠寧振武永平奉天行營副元帥[61]として李懷光を討伐し、その後河中節度使に遷り、一六年間にわたって在任する（七八四―七九九）。李懷光の叛亂を武力で鎭壓した直後であり、統治機能の回復や治安維持の必要という觀點からも、渾部の騎馬兵が從っていたと考えるべきである。渾瑊はこの後も各地の行軍や吐蕃討伐に活躍しており、これも渾部の從軍がなければ困難である。さらに、渾瑊の子の渾鋼は天德軍防禦使、渾鐬は元和初（八〇六）に豐州刺史・天德軍防禦使となり、最後に振武節度使となる。渾鎬は元和年間には延州刺史となり、その後義武軍（易定）節度使、その子の渾偘は義昌軍（橫海軍、滄州）節度使となる。これらの場合も、單身での任官ではなく渾部の騎馬兵を率いていると考えるべきであろう。特に延州刺史への就任時は沙陀の統御という目的があったことに鑑みて、渾の出身というだけでは不足であり、渾部の騎馬兵力が必要であった。

阿跌の李光進は上述のように振武節度使から靈州（朔方）節度使に遷り、三年目に歿した。李光顏は忠武軍節度使から長慶元年には一時的に義昌軍節度使も兼ね、さらに義成軍節度使・邠寧節度使を經て河東節度使に遷移した。彼らの子が河東節度使の下で任官するのは、本部の所在地に近いという他に、李光顏が河東節度使在任時に歿したことと關聯するであろう。李光進の次子が忠武軍節度押衙となるのは、當時は李光顏が忠武節度使であったことと關聯する。李誠元が若年時から本部の所在地に近い朔州で任官する他、李建元は「前河東節度右都押衙」、李播元は「前河東節度押衙左門□兵馬使」と河東節度使下の高位の武官となるのは、李光顏が河東節度使であったためであり、他は禁衞の將軍職や中央・地方の文官職を占める【表七】。一方で李光顏の長子の李昌元は開成四年（八三九）から會昌三年（八四三）まで鄜坊丹延等州節度觀察處置等使となり、末子の李安元は、李宴元の名で咸通六年（八六五）に夏州刺史・朔方等節度使となっていることが指摘されており[62]、阿跌部が唐末までなお廣範圍に勢力を維持していたことが窺える。

契苾通は勝州刺史在任時に本州蕃落使を兼ねており、明らかに所部以外の蕃部落を統括しているだけでなく、蔚州刺史在任時も回鶻討伐にあたって所部以外の部落を指揮できたことが指摘されており[63]、振武節度使在任當時も所部以外の蕃部

表七　阿跌李光進・李光顔の子の任官

	父名	官職	年次
1	李光進	嗣子・季元	河東衙前兵馬使檢校太子賓客兼監察御史→右武略軍使	八一五→八二一
2	李光進	燧元	陳許（忠武）節度押衙檢校太子賓客兼監察御史	八一五
3	李光進	毅元		八一五
4	李光進	綏元	宣義郎行太原府太原縣尉	八一五
5	李光進	宗元		八一五
6	李光進	吉元		八一五
7	李光顔	昌元	檢校戶部尚書兼御史大夫上柱國→通議大夫・使持節都督儀州諸軍事・儀州刺史・兼御史中丞・上柱國→御史大夫→羽林統軍→鄜坊丹延等州節度觀察處置等使・檢校戶部尚書・兼御史大夫	八二六→八二一→？→八四〇～八四三
8	李光顔	扶元	守左龍武軍大將軍知軍事兼御史中丞	八二六
9	李光顔	繼元	前太常寺主簿	八二六
10	李光顔	誠元	守朔州司馬兼監察御史→勝州刺史→朔州刺史	八二六～～八五一？～八五一
11	李光顔	建元	前河東節度右都押衙・檢校國子祭酒・兼殿中侍御史	八二六
12	李光顔	興元	前守衢王友兼監察御史	八二六
13	李光顔	榮元	守右羽林軍統軍・檢校左散騎常侍・兼御史大夫	八二六
14	李光顔	奉元	前行太原府清源縣丞	八二六
15	李光顔	播元	前河東節度押衙左門□兵馬使・兼監察御史	八二六
16	李光顔	安元	右軍先鋒兵馬使・守右驍衛將軍→右金吾衛大將軍→夏州刺史・朔方等節度使	八二六→八六五～八六九

〔出典〕『舊唐書』巻一一九、『唐方鎮年表』巻一（以上、中華書局）、「李光進碑」（『山右石刻叢編』巻八、三三―四〇葉。『全唐文』五四三、山西教育出版社、三二五九―三二六〇頁）、「李光顔碑」（『山右石刻叢編』巻九、一六―二五葉。『全唐文』六三一、山西教育出版社、三七七一―三七七二頁）、『白氏長慶集』巻五三、「裴度等承天題記」（『山右石刻叢編』巻八、四七―五三葉）

落を統括している。とすれば、各地の刺史として任官する際も、先に指摘した渾鎬が延州刺史として沙陀を統御した例から考えても、儀・丹州刺史への赴任においても少なくとも契苾部の騎馬兵を伴っていると考えるべきであろう。契苾通の墓誌に見える七人の子は、七人中六名が河東節度使・靈武節度使・滄州（義昌）節度使・邠寧節度使・河中節度使下の武官として任官した【表八】。八五四年に文官として任官している嗣子の公文も、母である何氏の墓誌銘では節度使麾下の武官で、「契苾通墓誌銘」にも公文が契苾通の下で「嘗て公に副たりて命を銜む」とあることから、本来は武官である。このうち靈武は渾瑊や李光進も赴任した重要地點であり、代北集團の勢力が代北に限らないことを明示している。義昌節度使での任官は、直後に渾偘が義昌節度使になることとも關係する。邠寧節度使は李光顔が、河中節度使は渾瑊が長く在任した所である。

表八　契苾通の子の任官

何氏墓誌	官　職	年　次	契苾通墓誌	官　職	年　次
慶　郎	沒				大中八（八五四）
公　度	沒				
公　文	□賀□□□□兼節度押衙	大中元（八四七）	公　文	鄂王府司馬	大中八（八五四）
公　應	河東節度押衙□兵馬使	大中元（八四七）	公　應	河東節度押衙左驍雄兵馬使	大中八（八五四）
公　廉	□州節度□□兵馬使	大中元（八四七）			
			公　瑜	靈武節度押衙決勝六將都知兵馬使	大中八（八五四）
	公廡已下五人幼少未不仕	大中元（八四七）			
			公　武	滄州節度押衙	大中八（八五四）
			公　約	邠寧節度押衙	大中八（八五四）
			公　綏	河中衙前兵馬使	大中八（八五四）
			公　廣		

〔出典〕「契苾公妻何氏墓誌銘」、「契苾通墓誌銘」

類似の事例として、契苾通と共にウイグル討伐に參劃したソグド人何清朝の存在も指摘しておきたい。何清朝は契苾通夫人何氏の親族、おそらくは兄弟と想定される[64]。何氏の實家は代々單于府に奉職する武門の家柄であるが、その出身と思われる何清朝は、會昌二年には銀州刺史・充本州押蕃落使として蔚州刺史の契苾通と共に南走派ウイグルの討伐軍を率い、會昌五年に朔方節度使（在任：八四五―八四六）となる。代北に入った鐵勒系やソグド系等の遊牧部落は、代北にとどまらず河東・河中、邠寧・銀州・天德・靈武、東は義武軍（易定）、義昌軍（滄州）という、もと住んでいたオルドスから、河北に至るまで廣範圍に及ぶ勢力を保持していたことが窺える。これらは、後の沙陀突厥の勢力範圍と重なる部分も多い。渾・契苾や阿跌などの鐵勒系遊牧民は、徐々に東方に根據地を移しつつ、オルドスにも勢力を維持し、八世紀末は渾部が最大勢力を誇り、九世紀に入るとその地位は阿跌に遷り、九世紀半ばには契苾・渾が武力集團の筆頭である振武節度使の地位を占め、その集大成として、九世紀後半からは沙陀が代北集團を統合して最大勢力となったと考えられよう。

おわりに

筆者は嘗て、契苾・吐谷渾・沙陀三部落が唐王朝から「代北五部」として把握され、唐末には代北五部に北邊財政權が移行し、これらの遊牧部落が長い時間をかけて沙陀に統合されていくことを論じた。本稿では、これに加えて、沙陀突厥を構成した鐵勒系や党項部落を廣く「代北集團」と捉えた。そして、彼らが唐後半の華北地域で徐々に東遷しつつ、代北・河東地域に入っていき、唐代の著名な「蕃將」を輩出しつつ、代北だけでなく、河東道やオルドスまで含む廣い範圍に勢力を維持し、唐末の沙陀突厥に繋がることを、鐵勒系の羈縻州である皋蘭州が置かれた渾部、賀蘭州が置かれた契苾部、雞田州が置かれた阿跌部の關係を通して論じた。

唐王朝は、しばしば指摘されるように北邊防衛を羈縻州の形態を維持した遊牧系の集團に依存しており、その上に乘っている王朝であった[65]。しかしこれは「任使已に熟す」と見なされた遊牧民の意志に依存する體制にならざるを得ない。こ

れらの諸族が唐王朝を支える理由を失って沙陀の下に吸収され、河朔三鎮や盧龍管内に残っていた東北諸族やソグド人らが沙陀突厥の下に糾合されていった時、唐王朝は北邊防衛に關わる戰力を失うとともに、王朝の存立基盤をも一擧に喪失することになったであろう。こうした動きは、すでに唐後半期における鐵勒系部落の動向の中にその萌芽を見いだせるのである。

唐末から五代に沙陀突厥による政權が建立された背景には、唐王朝自體が廣く遊牧系諸族を取り込んでいたという事實がある。それらの諸族は唐後半期に次々と河東や代北に移動していき、これらの諸族が沙陀を受け入れる役割を果たしていったことが、沙陀突厥の興隆の構造的背景にあると考えられるのである。

註

（1）主要な成果としては、以下の諸論考・著書がある。石見清裕「唐代外國貿易・在留外國人をめぐる諸問題」（同〔一九九九a〕五二一―五二六頁）、同〔一九九九b〕。妹尾達彦〔二〇〇一〕三〇―三四頁。同〔二〇〇六〕一四三―一七一頁。森安孝夫〔二〇〇七〕五九―六二頁。沙陀突厥に關する研究は石見清裕〔二〇〇五〕にまとめられているため、本稿では論旨に直接關係のあるものを引用するに留める。

（2）樊文禮〔二〇〇〇〕。

（3）西村陽子〔二〇〇八〕。

（4）西村陽子〔二〇〇九〕、〔二〇一〇〕。

（5）榮新江〔一九九一〕。

（6）西村陽子〔二〇〇八〕。

（7）蘇航〔二〇一〇〕。

（8）山下將司〔二〇一四〕。

（9）日野開三郎〔一九八〇〕第三章「藩鎮の跋扈」、九〇―一一〇頁。

（10）栗原益男〔一九七一〕一六八頁。

（11）堀敏一〔二〇〇二〕、二八五―二九七頁。

（12）任育才〔一九七〇〕。

（13）陳寅恪〔一九七一〕、一二四―一三八頁。桑原〔一九六八〕、二八二―二八三頁。

（14）馬小鶴・柏曉斌〔一九八六〕一五二頁（馬小鶴〔二〇〇九〕三三〇頁に再錄）。西村陽子〔二〇〇九〕。趙振華〔二〇一〇〕五〇四―五一六頁。

（15）榮新江〔二〇〇三〕一〇四―一〇六頁。張說「河西節度

副大使安公碑銘竝序」（『張說之文集』巻一六、一〇二－一〇三頁（『四部叢刊』本）。『文苑英華』巻九一七、四八二八頁）。安興貴の曾孫にあたる安忠敬の碑銘で、安忠敬の子が安重璋（李抱玉）、李抱玉の従父弟が李抱臣と李抱眞である。

(16) 西村陽子〔二〇〇九〕一〇頁。

(17) 陳寅恪〔一九七一〕一三三－一三四頁。森部豊〔二〇一〇〕一二三－一八一頁。章群〔一九八六〕一九三頁、六〇八頁も參照。王武俊と張孝忠の出身については、吉本道雅〔二〇一一〕八八頁、注(49)參照

(18) 『通鑑』興元元年七月條には「李懷光左右多胡人」〔七四四一頁〕と見え、『舊唐書』巻一二〇、李懷光傳には「懷光左右皆胡虜」〔三四九四頁〕と見える。

(19) 王武俊とともに李寶臣に仕え、建中三年、朝廷に歸順した。『通鑑』巻二二七、建中三年正月條「惟岳之將康日知、以趙州歸國。」〔七三一七頁〕。息子の康志睦は平盧節度使（八二五－八三一年）、孫の康承訓は龐勛の亂の鎭壓に沙陀を率いて殊功をあげて河東節度使（在任：八六九－八七〇年）となる【表四】。曾孫の康傳業は鄜坊節度使（在任：八七四－八七八年）。

(20) 前揭注(15)。『舊唐書』巻一三二、李抱玉傳に「武德功臣安興貴之裔。代居河西、善養名馬、爲時所稱。」〔三六四五頁〕と見える。武威安氏が河西や固原で牧馬を家業としたことは山下將司〔二〇〇八〕參照。唐初から五代までの武威安氏の家系は福島恵〔二〇一二〕一六〇－一六三頁。穆員撰「相國義陽郡王李抱眞墓誌銘」『文苑英華』巻九三七、四九二六－四九二八頁。昭義節度使の管區からは續々とソグド人墓誌が出土している。

(21) 蘇航〔二〇一〇〕二六六頁。

(22) このうち契苾部については、酋長である契苾通が、夫人何氏が嫁いできた二〇歲頃に既に振武の都押衙馬步都知兵馬使になっており、それより前に既に「始效職單于府」であったというから、八世紀末には既に代北にいたはずで、渾部とほぼ同時に移動した可能性が高い。後述を參照。

(23) 岡崎精郎〔一九七二〕四五－五一頁、周偉洲〔二〇〇四〕五四－八九頁、森部豊〔二〇〇四〕〔二〇一〇〕。

(24) 「興元元年（七八四）二月…時吐蕃款塞請以兵助平國難、故遣使焉。四月…、是月、渾瑊與吐蕃論莽羅率衆大破朱泚將韓旻、張廷芝、宋歸朝等於武功之武亭川、斬首萬餘級。貞元二年（七八六）…八月、吐蕃寇涇・隴・邠・寧數道、掠人畜、取禾稼、西境騷然。諸道節度及軍鎭咸閉壁自守而已。京師戒嚴。上遣左金吾將軍張獻甫與神策將李昇曇・蘇清沔等統兵屯於咸陽、召河中節度駱元光率衆戍咸陽以援之。十一月、吐蕃陷鹽州。初、賊之來也、刺史杜彥光使以牛酒犒之。吐蕃謂曰、「我欲州城居之、聽爾率其人而去。」彥光乃悉衆奔鄜州。十二月、陷夏州、刺史拓拔乾暉率衆而去、復據其城。又寇銀州、素無城壁、人皆奔散。……又蕃軍頃年破朱泚衆於武功、未獲報償、所以來耳。」『舊唐書』巻一九六、吐蕃下、五二四九頁。拓拔乾暉が党項であることは、『元和姓纂』巻十、拓跋條〔一五七七－一五七八頁〕及び

周偉洲〔二〇〇四〕六四頁を參照。

(25) 當時の國際・國內情勢に應じて主に吐蕃・回鶻對策や党項對策、唐末になると內地の叛亂鎭壓や沙陀對策なども要請されたと考えられる。

(26) 周偉洲〔二〇〇四〕五四—八九頁。岡崎精郎〔一九七二〕四五—五一頁。

(27) 『唐會要』卷七三、「單于都護府」條、一五五二頁。

(28) 傅璇琮・周建國校箋『李德裕文集校箋』河北敎育出版社、二〇〇〇年、三一六頁。

(29) 西村陽子〔二〇一〇〕。

(30) 渾氏の世系の初期と末期には混亂がある。趙超編著『新唐書宰相世系表集校』卷五、渾氏條、中華書局、一九九八年、八四四頁。

(31) 『新唐書』卷二一七上、回鶻上「武后時、突厥默啜方彊、取鐵勒故地、故回紇與契苾・思結・渾三部度磧、徙甘・涼閒、然唐常取其壯騎佐赤水軍云。」〔六一一四頁〕。

(32) 『舊唐書』卷一二、德宗建中四年、冬十月丙午條では「渾瑊以子弟家屬至」〔三三七頁〕と記される。

(33) 「故朔方・河中・晉・絳・邠・寧・慶・等州兵馬副元帥、河中絳邠節度・度支營田觀察處置等使・元從・奉天定難功臣・開府儀同三司・檢校司徒・兼中書令、河中尹・上柱國・咸寧郡王・贈太師、忠武渾公神道碑銘」『文苑英華』卷八八六、四六六八—四六六九頁。

(34) 「義昌軍節度使渾公神道碑」『文苑英華』卷九一六、四八二三—四八二五頁。

(35) 岑仲勉〔二〇〇四〕、二二七—二二九頁。

(36) 余軍・衞忠〔一九九六〕。『全唐文補遺』卷七、三五〇頁。

(37) 契苾氏の先塋は咸陽にあるため、ここで渾公夫人契苾氏が埋葬されたのは渾氏の先塋である。

(38) 西村陽子〔二〇〇八〕に收める「契苾氏系圖」〔一〇頁〕參照。

(39) 「契苾通墓誌銘」の拓本寫眞は『隋唐五代墓誌匯編』陝西卷第四冊、一三七頁、釋文は『全唐文補遺』一、三五八頁に收める。「契苾公妻何氏墓誌銘」は『陶齋藏石記』卷三三、第二葉上および『唐代墓誌彙編』下（大中〇一二）に釋文を收める。西村陽子〔二〇〇八〕。

(40) 『舊唐書』卷一二・德宗本紀〔三三〇頁〕。李鴻賓〔二〇〇〇〕三四九頁。

(41) 『新唐書』卷七五下、宰相世系五下、渾氏條〔三三七九—三三八三頁〕。『唐方鎭年表』卷一、振武〔一七六頁〕。

(42) 吐谷渾・契苾・沙陀三部落が烏介可汗を中心とする南走派ウイグル討伐に實戰部隊として參與したことは、『資治通鑑』卷二四六、會昌二年九月條「李思忠請與契苾・沙陀・吐谷渾六千騎合勢擊回鶻。」〔七九六七頁〕や卷二四七、會昌三年春正月條「回鶻烏介可汗帥眾侵逼振武，劉沔遣麟州刺史石雄、都知兵馬使王逢帥沙陀朱邪赤心三部及契苾、拓跋三千騎襲其牙帳」〔七九七一頁〕等、多數記錄が殘っている。特に會昌三年正月は、烏介可汗を擊破し、太和公主を奪還する戰鬪の主力部隊として大きな功績があった。『資治通鑑考異』卷二二、一四九頁（『四部叢刊』本）參照。

第一章第三節も參照。

(43)『新唐書』卷一五五、渾鎬傳、四八九五頁。

(44) 西村〔二〇一〇〕六七頁。蘇航〔二〇一〇〕二六三―二六八頁。山下〔二〇一四〕一〇―一一頁。「舍利鐵石墓誌銘」については、森部・齊藤〔二〇一三〕。

(45) 森部豐〔二〇〇一〕

(46) 蘇航〔二〇一〇〕二六七頁、山下〔二〇一四〕一〇頁。

(47) 傅璇琮・周建國校箋『李德裕文集校箋』、二九九頁。

(48) 阿跌部にソグド人が含まれていたらしい痕跡は他にも存在する。例えば、開成五年（八四〇）に建立された「李光顔碑」の末尾には「汝南の翟文劘刻す」と記されている。翟氏はソグド人に多く見られる姓であるため、この人物もソグド人である可能性を否定できない〔「李光顔碑」『山右石刻叢編』卷九、第一六葉A―第一九葉A〕。また、後晉の天福年間の鷄田州部落長史の何君政の存在も、阿跌部落にソグド人が含まれていたことを示唆する。

(49) 西村〔二〇一四〕。

(50) 森部〔二〇一〇〕二〇五頁。

(51) 蘇航〔二〇一〇〕二六八頁。

(52) 何君政が帶びた職は「鷄田府部落長史」である。墓誌には「公、部落を首領す」と書かれているが、「長史」は雜田州刺史や鷄田府都督といった酋帥を示す職ではなく、ソグド人の部落長史・何君政の存在は、鷄田州が後晉時期にいたってなお阿跌部落である可能性を排除しない。雜田州の中には唐代から多數のソグド人が存在し、その中の長史クラスの墓誌が殘ったと考えるべきではあるまいか。

(53)『四部叢刊』本、一五二―一五三頁。

(54)『唐刺史考全編』卷九六、河東道、朔州〔一三五頁〕。押蕃使については村井〔二〇〇三〕參照。

(55)『唐刺史考全編』卷二四、關內道、勝州〔三八一―三八二頁〕。

(56) 山下將司氏は阿跌部の事績を檢討する中で、阿跌氏と突厥阿史那氏との間の二代にわたる婚姻關係、さらには七四九年に唐に降った舍利葛旃の舍利氏との婚姻關係を指摘し、これが鐵勒阿跌氏と突厥第二可汗國崩壞後に唐領內に新たに唐に降った突厥遺民の結合の結果であるとした。そして、李光進・李光顔兄弟が阿史那・舍利兩氏に代表される突厥遺民集團を背後勢力として有していたことが、阿跌部擡頭の原動力であり、數十年後の契苾部の擡頭も突厥遺民の招撫に成功したためと考えるべきであるとする。〔山下將司〔二〇一四〕二一―二四頁〕。筆者は、八世紀半ばにおいて唐に降った突厥が一定の存在感を持っていたことには同意するが、突厥の勢力が九世紀まで持續し、突厥遺民の招撫が契苾部の興隆の原動力とする點には同意できない。これらの諸點は、墓誌の解釋と共に、本稿で明らかにした鐵勒諸部や党項・ソグドの動向、さらには當時の華北の情勢とも併せて再檢討すべき課題である。なお、代北に突厥阿史那氏が存在していたことを示す證左は他にも存在する。例えば、たびたび渾瑊と共に活躍するソグド人の李元諒（駱元光）の夫人は突厥阿史那氏の出身であり、「李元諒墓誌」

に「夫人河南阿史那氏、北海郡夫人、代北著姓也」という。李元諒が率いた軍團は突厥阿史那氏との結びつきも考慮する必要がある。この河南はオルドス北部のことで、北海郡は契苾通と同じ郡望である。また、九世紀初めに天文學を以て唐王朝に仕えた波斯人李素の夫人で、長慶二年（八二二）に卒した卑失氏もまた突厥であることが指摘されている。突厥は阿跌だけでなく様々な部族と結びついていたはずで、こうした事例も檢討する必要がある。「李元諒墓誌」の拓本は『隋唐五代墓誌匯編』陝西卷第四册［五六頁］、釋文は『唐代墓誌彙編』貞元〇三〇［七五四－七五五頁］に收める。李素夫人卑失氏については、榮新江〔二〇〇一〕二三八－二五七頁を參照。

(57) 蘇航〔二〇一〇〕二六九－二七〇頁。山下〔二〇一四〕二八頁。

(58) 傅璇琮・周建國校箋『李德裕文集校箋』、二六六頁。

(59) 山下〔二〇一四〕二四頁。

(60) この二者では、臨時の動員で十分か、もしくは長期的な勢力基盤が必要かにおいて、さらに酋帥の持ちうる裁量幅においても大きな違いが出てくる可能性が高い。

(61) 『新唐書』卷一五五、渾瑊傳〔四八九三頁〕。

(62) 『舊唐書』卷一九上、懿宗記、咸通六年五月條「以右金吾大將軍李宴元爲夏州刺史・朔方節度等使。」〔六五九頁〕。李宴元が李安元である可能性は、夙に清の胡聘之が『山右石刻叢編』卷九所收の「李光顔碑」に附した詳細な按語の中で指摘している［第二五葉A］。

(63) 蘇航〔二〇一〇〕二七四－二七五頁。

(64) 西村陽子〔二〇〇八〕注(38)。

(65) 山下將司〔二〇一一〕一〇頁。

參考文獻

［史資料］『隋書』『舊唐書』『新唐書』『舊五代史』『資治通鑑』『文苑英華』『元和姓纂』『陸贄集』『唐方鎮年表』『奉天錄』（以上、中華書局）、『唐會要』（上海古籍出版社）、『李德裕文集校箋』（河北教育出版社）、『山右石刻叢編』（山西人民出版社）、『全唐文補遺』『楡林碑石』（以上、三秦出版社）、『隋唐五代墓誌匯編』（天津古籍出版社）、『唐代墓誌彙編』（上海古籍出版社）、『唐刺史考全編』（安徽大學出版社）。

［日文］

石見清裕〔一九九九a〕『唐の北方問題と國際秩序』汲古書院

〔一九九九b〕「ラティモアの邊境論と漢～唐間の中國北邊」『東アジアにおける國家と地域』刀水書房

〔二〇〇五〕「沙陀突厥史 ――日本・中國の學界における成果と課題 ――」『早稲田大學モンゴル研究所紀要』一二一―一三八頁。
岡崎精郎〔一九七二〕『タングート古代史研究』東洋史研究會
栗原益男〔一九七一〕「安史の亂と藩鎮體制の展開」『岩波講座世界歴史六・古代六』岩波書店、一六一―一九六頁。
桑原隲藏〔一九六八〕「隋唐時代に支那に來往した西域人に就いて」『桑原隲藏全集』第二卷、岩波書店、二七〇―三六〇頁。
妹尾達彦〔二〇〇一〕『長安の都市計劃』講談社
〔二〇〇六〕「都の立地 ――中國大陸の事例」『人文研紀要〔中央大學〕』五八號、一四三―一七一頁。
西村陽子〔二〇〇八〕「唐末五代の代北における沙陀集團の內部構造と代北水運使 ――「契苾通墓誌銘」の分析を中心として ――」『內陸アジア史研究』第二三號、一―二四頁。
〔二〇〇九〕「唐末「支謨墓誌銘」と沙陀の動向 ――九世紀の代北地域 ――」『史學雜誌』第一一八編第四號、一―三八頁。
〔二〇一〇〕「九―一〇世紀の沙陀突厥の活動と唐王朝」『歴史評論』六一―七五頁。
日野開三郎〔一九八〇〕「支那中世の軍閥」『日野開三郎著作集』第一卷、三一書房、二一頁―一七一頁。
福島　惠〔二〇一二〕「「安元壽墓誌」（唐・光宅元年）譯注」森安孝夫編『ソグドからウイグルへ』汲古書院、一四一―一七四頁。
堀　敏一〔二〇〇二〕「唐末諸反亂の性格」『唐末五代變革期の政治と經濟』汲古書院
村井恭子〔二〇〇三〕「押蕃使の設置について ――唐玄宗期における對異民族政策の轉換」『東洋學報』第八四卷四號、四二一―四五二頁。
森部豊〔二〇〇一〕「後晉安萬金・何氏夫妻墓誌銘および何君政墓誌銘」『內陸アジア史研究』一六號、一―七〇頁。
〔二〇〇四〕「唐末五代の代北におけるソグド系突厥と沙陀」『東洋史研究』第六二卷四號、六〇―九三頁。
〔二〇一〇〕『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』關西大學出版部
森部豊・齊藤茂雄〔二〇一三〕「舍利石鐵墓誌の研究」『關西大學東西學術研究』第四六輯、一―二〇頁。
森安孝夫〔二〇〇七〕『シルクロードと唐帝國』講談社
山下將司〔二〇〇八〕「唐の監牧制と中國在住ソグド人の牧馬」『東洋史研究』第六六卷第四號、一―三〇頁。
〔二〇一一〕「唐のテュルク人蕃兵」『歴史學研究』八八一號、一―一一頁。
〔二〇一四〕「唐の「元和中興」におけるテュルク軍團」『東洋史研究』七二卷第四號、一―三五頁。
吉本道雅〔二〇一一〕「遼史世表疏證」『京都大學文學部研究紀要』五〇、三一―九二頁。

［中文］

岑　仲勉〔二〇〇四〕『唐史餘瀋』岑仲勉著作集（六）、中華書局

陳　寅恪〔一九七一〕『唐代政治史述論稿』中央研究院歷史語言研究所特刊之三、陳寅恪先生論集、一〇七－二一〇頁。

樊　文禮〔二〇〇〇〕『唐末五代的代北集團』中國文聯出版社

李　鴻賓〔二〇〇〇〕『唐朝朔方軍研究――兼論唐廷與西北諸族的關係及其演變』吉林人民出版社

馬小鶴・柏曉斌〔一九八六〕「隋唐時代洛陽華化月支胡初探」『中國文化研究集刊』三、一四四－一六〇頁。

馬　小鶴〔二〇〇九〕『摩尼教與古代西域史研究』西域歷史語言研究叢書、中國人民大學出版社

任　育才〔一九七〇〕『唐德宗奉天定難及其史料之研究』臺灣商務印書館

榮　新江〔一九九一〕「唐代河西地區鐵勒部落的入居及其消亡」費孝通編『中華民族研究新探索』中國社會科學出版社、二八一－三〇四頁。

〔二〇〇一〕『中古中國與外來文明』生活・讀書・新知三聯書店

〔二〇〇三〕「安史之亂後粟特人的動向」『暨南史學』第二輯、一〇二－一二三頁。

蘇　航〔二〇一〇〕「唐後期河東北部的鐵勒勢力――從雞田州的變遷說起」榮新江主編『唐研究』卷一六、北京大學、二六一－二七七頁。

余軍・衛忠〔一九九六〕「唐皋蘭州都督契苾夫人墓誌考釋」『寧夏考古文集』寧夏人民出版社、一五七－一六二頁。

章　羣〔一九八六〕『唐代蕃將研究』聯經出版事業公司

趙　振華〔二〇一〇〕『洛陽古代銘刻文獻研究』三秦出版社

周　偉洲〔二〇〇四〕『早期党項研究』中國社會科學出版社

附記：本稿脫稿後、本稿と關聯の深い內容を持つ村井恭子氏の論考「河西と代北：九世紀前半の唐北邊藩鎮と遊牧兵」（『東洋史研究』七四巻二號、四七－八二頁、二〇一五年九月）が刊行された。氏の論考は特に本論文の第二章第四節で扱った問題に關係するため、併せて參照されたい。尙、本稿は二〇一二年度に提出された筆者の學位論文の一部を修訂したものであり、村井氏の論考とは別個に執筆されたものである。

TURKISH TROOPS OF THE MILITARY CLIQUES IN NORTH CHINA DURING THE LATTER HALF OF THE TANG ERA : THE BACKGROUND OF ESTABLISHMENT OF THE SHATUO TURK DYNASTIES

NISHIMURA Yoko

This paper clarifies the activities of groups of Turkish 鐵勒 troops in the central government and military cliques in Northern China during the latter half of the Tang era through an examination of the Rebellion of Zhu Ci 朱泚 that occurred during the Jianzhong era (AD. 780–783). These Turkish groups occupied important positions in the central government and military cliques in Northern China during the latter half of the Tang era as they gradually moved their power bases to the Daibei 代北 and Hedong 河東 districts. This paper argues that these corps of Turkish warriors, while maintaining strong influence over a large area extending over the Daibei, Hedong districts and as far as the Ordos, merged with the Shatuo 沙陀 Turks, and that this was the background of the establishment of the Shatuo (Five) Dynasties.

In the first section, the author takes up the Zhu Ci rebellion as an example of the spread of the nomadic tribes in military cliques in North China after the Anshi Rebellion, and points out these nomads occupied high positions not only in the central government but also in the military cliques and that they included many Turks and Soghdians. In the second section, the author points out that Hun Jian 渾瑊, who was a famous premier and general during the reign of Emperor Dezong, was a chief of the Hun 渾 Turks, doubled as commander of Gaolanzhou, which was a *Jimizhou* 羈縻州 established for the Turks, and was a relative by marriage to Qibi 契苾 Turks, who composed one of the Daibei Five tribes 代北五部. The movements of the Hun and Qibi Turks resembled one another, both migrating from Lingwu 靈武 to Daibei, where they held great power. A hidden factor behind the energetic activity of Hun Jian was the large migration of Turks, who had built up power in this area and merged with the Shatuo Turks. At this time, there was a movement of Turkish, Soghdian, and Tangut 党項 peoples to migrate to Daibei and Hedong, and at the end of the Tang dynasty many of these groups joined the Shatuo Turks.

Therefore, behind the establishment of the political power of the Shatuo Turks, we can see the coalescing of these nomadic tribes.